

年末特別号

コロナ禍、子どもたちの貧困問題を考える

一時、収束の気配をみせていた新型コロナウイルスですが、第三波となり感染者が増え続けています。海外ではワクチンの接種が始まっていますが、未だ先が見えず、私たちは新しい生活様式をこれからの常識として受け入れ、みんなで立ち向かっていかななくてはなりません。



その中で、新型コロナウイルスによる影響は弱者ほど大きなものとなっています。特に子どもたちへの影響を懸念しています。例えば、フードバンクに助けを求める方の割合は大きく増えました。収入減により学生の利用も急速に増えています。あるフードバンクの関係者は「昔は世話焼きやお裾分けで結構支えていた。それが今は自助と自己責任、自分ではどうにもできな限界にきている。一人も取り残さないような社会になって欲しい」と言います。

また一時リモート授業となり、ネットやデバイスの環境が整備できない子どもたちは対応できず、学業は遅れるばかりで、その後なかなか追いつくことができている状況にあります。ある児童養護施設の関係者は「ネット環境もなくスマホも持っていない子どもたちは、完全に取り残されてしまっている。外にも出られないので、そのストレスをなんとかしなくてはいけない。この春、18歳で退所した子どもたちもコロナ禍でタイミングが悪く心配だ」と言います。

日本において子どもの7人に1人が貧困である現実があっても、目に見えた状況が日々私たちの周りにはありません。しかし、格差は広がり子どもたちの貧困問題は本当に深刻な状況にあります。社会の谷間に落とされそうな、または落とされている子どもたちがいることを、私たちは真剣に受け止め考えなくてはなりません。

新型コロナウイルスは社会の弱者を更に苦しめています。どうかその人たちのために行動して欲しいと思います。考えるだけでは子どもたちは救われません。今できることが何かあるはずで、小さなことでよいので、まずは周りに目を配り手が届く子どもたちを支援して欲しいと切に願います。私どもも小さなことを積み重ねながら、弱者のために行政とも協働しながら活動しています。年末年始にむけて子どもたちが笑顔で過ごせることを願っています。多くの方が支え助け合う社会を目指し、人権意識を持っていただけることを信じ、諦めずにこれからも私どもは活動してまいります。

子どもの“いじめ”や“不登校”の原因を元から断つために (連載・第2回)



「皆と同じように」を求める“同調圧力”の弊害

著名な教育学者の一人である苫野一徳(とまの・いっとく)氏(熊本大学教育学部准教授)は、「みんなで同じことを、同じペースで、同じようなやり方で勉強するというやり方が、もはや限界に来ている」との趣旨を述べています。(※「学校」をつくり直す(河出新書)等)

みんなで同じことを同じペースで勉強していると、一度つまずくと授業内容が分からなくなり、その先クラスメートに付いていけなくなるといったことが起こりがちです。また、クラス内でみんなと同じであることを求める雰囲気が強いと、“みんなと違う”子どもが“いじめ”の対象になりやすくなります。

その結果、そうした子どもたちの多くは、学校に行くのが苦痛になります。また、いじめの原因に大きく影響しているのは自己肯定感の低さだ、とよく言われます。子どもが「自分はありのままの姿で、親や先生、友だち等から認められている」と感じているかどうか。

自己肯定感が低いと、自分の力を周囲に示すために、自分より弱い人をいじめたり、いじめられても自分を守らず諦めてしまうといった状況になりがちです。

裏面に続きます



全ての子供たちの可能性を引き出す学びの実現に向けて

苫野氏は、そうした従来の画一的な教育がもたらす弊害を乗り越えるため、「学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合へ」を提案しています。「みんなで同じことを、同じペースで」ではなく、「ゆるやかな協同性」に支えられた「個の学び」が尊重される学びへと転換しようというものです。具体的には以下の3本柱です。

- ① **学びの個別化**とは、いつどこで誰とどんなペース、どんな学び方で学ぶのかなど、学びをそれぞれの子どもに合った仕方個別化すること。
- ② **学びの協同化**とは、必要に応じて人の力を借りたり貸したりしながら、支え合って学びを進められる環境を整えること。
- ③ **学びのプロジェクト化**とは、カリキュラムの中核をプロジェクト(探究)型の学習へと転換すること。
(※探究型の学習とは、出来合いの問いと答えばかりを学ぶのではなく、自分(たち)なりの問いを立てて、自分(たち)なりの方法で、自分(たち)なりの答えにたどり着く、そのような学びのあり方)

こうした理想を実現するためのユニークな幼・小・中一貫校が令和2年4月、長野県軽井沢町内に誕生しました。軽井沢風越学園です。(※同学園ホームページ中の「わたしたちのカリキュラム」サイトでは、子どもたちの学びの様子を数本の動画で見ることができます。)

山梨県内では、教育学者の堀真一郎氏が中心となり平成21年に開校した「南アルプス子どもの村小学校・中学校」が、そうした取り組みを十年来、先駆的に実践しています。(※同校ホームページ、詳しくは堀真一郎著「きのくに子どもの村の教育」(黎明書房))また、長野県佐久穂町に昨年4月開校した大日向小学校にも、共通する思想があります。近年では国においても、そうした教育理念を次第に共有するようになってきました。

例えば、文部科学省(中央教育審議会初等中等教育分科会)が今年11月に発表した「令和の日本型学校教育の構築を目指して(答申素案)~全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現~」を読むと、苫野氏等の提案と類似した考え方を数多く見出すことができます。

(次号に続きます)

<参考ホームページ>

軽井沢風越学園(長野県軽井沢町)
<https://kazakoshi.ed.jp/>



南アルプス子どもの村小学校・中学校(南アルプス市徳永)
http://www.kinokuni.ac.jp/nc_alps/html/htdocs/?page_id=13



きのくに子どもの村学園(長和歌山県橋本市)
https://berd.benesse.jp/feature/future/topics_2/activity01/



学校法人茂来学園・大日向小学校(長野県佐久穂町)
<https://www.jenaplanschool.ac.jp/>



活動報告

人権啓発講演会 11月23日(木)、中北教育事務所にて、12月2日(水)、甲府市総合市民会館にて、人権啓発講演会を開催しました。



人権啓発パネル展 12月3日(水)~12月16日(水)、甲府市北公民館、甲府市南公民館において、「命のメッセージ展」と題して人権啓発パネル展を開催しました。



※人権移動教室の授業を受けた子供たちの感想文が、裏面にてご覧いただけます。

協賛：山梨県、甲府市、甲斐市



国連 NGO 横浜国際人権センター山梨ブランチャ 会長：横山隆史
特定非営利活動法人横浜国際人権センター山梨

〒400-0031 山梨県甲府市上町 601-4 甲府市環境センター内 なでしこ工房 1階事務室
TEL. 055-243-8563 FAX. 055-243-8564 <http://yamanashi.yihrc.or.jp/> E-mail. yamanashi@yihrc.or.jp

会員企業：(株)成心設備、西関東開発(株)、(株)ウィルマート、(株)R&C、(株)フジコー、(株)渡辺工業所、甲府市管工事協同組合